ESSAY

ビルロートを訪ねて

荒井邦佳
東京都立駒込病院外科

幽門側胃切除後の再建法としてビルロートI法あるいはビルロートII法があることはよく知られており，これらは現在でももっとも汎用されている方法である．このビルロートとはドイツ（当時はプロシヤ）生まれのTheodor Billroth（1829〜1894）のことであり，近代外科学の発展を基礎づけた偉大な外科医の一人である．

ビルロートの最大の功績は，胃癌に対する胃切除を世界ではじめて成功させたことであり，われわれ胃癌の外科を志しているものにとっては神様的な存在といえる．この“神様”ビルロートが切除した切除胃の標本が保存されていることは人づてに聞いてはいたが，第2回の国際胃癌学会がミュンヘンで開催された折りに，この最初の切除胃を訪ねてみた．

ビルロートについての資料は非常に乏しいが，新潟大学の故・堺哲郎教授がライフワークとして書かれた「Theodor Billrothの生涯」および東京歯科大学市川病院の吉野肇一教授にいただいた資料をもとに，駒込病院胃外科グループの3人は1997年4月23日am 11：35，成田を発ちウイーンへ向かった．

ウイーン到着は現地時間の4月23日pm 9：30で気温は8度と肌寒かった．翌朝は前日とはうって変わり快晴で気温も20度と暖かかった．午前中はシュテファン寺院を見学し，昼食は地ビールを飲みながら草鞋のようなシュニッツエル（仔牛のカツレツ）を食べた．さて，午後からはいよいよ目的の切除胃があるというウイーン大学病院へ向かった．ウイーン大学は市の中心部にあるが大学病院は北寄りの郊外にあり，西駅からU-6で五つ目であった．受付でビルロートの切除胃の所在を聞いたところ，ここにはないから医学博物館に行ってみろという．医学博物館は病院の裏手にあるというが敷地は広いのでU-6で一つ先の駅で降り路面電車（トラム41で3駅目）に乗り継いで行った．3階建ての北側の2階部分が博物館となっており，階段の壁にはRokitanskyをはじめ，HebraやSemmelweisといった一度は聞いたことのある有名な教授の写真が飾られ，その中にビルロートの写真（**写真1**）もあった．比較的？　若い受付嬢に100円程度の入場料を渡し，気持ちの高鳴りを抑えつつ最初の陳列室に入った．

中央の陳列台の正面にホルマリンにつけられ白っぽくなった切除胃がオーラを放つように置かれていた．切除したままの状態に再縫合されており内腔はみえないが，幽門狭窄型のボルマン4型胃癌のようであった．この症例は43歳の女性で，1881年1月29日に手術を受けた．この時，ビルロートは51歳，ウイーン大学教授に赴任14年目であった．これに先立ち1879年4月，鉗子にその名を残すPeanが史上はじめて胃癌に対し胃切除を行

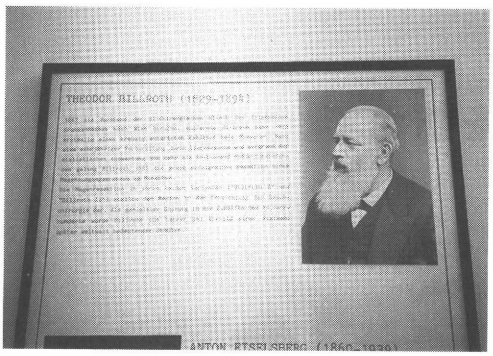

写真 1

ったが第5病日に死亡，ついで1880年11月にRydygier（30歳の若輩）が試みたが12時間後に患者は死亡している．ビルロートは3人目ということになるが，前2者とは異なり周到な動物実験を積み重ね，この手術を成功させた．現在のようにリンパ節郭清はしていないが，手術時間は1時間30分，出血量はごく少量であったらしい．この患者は約4カ月後に再発死亡し，その剖検時の残胃標本もホルマリンにつけられ隣に展示されているが吻合部には癌の遺残はみられない．内腔を観察するために切開した部分を再縫合しているが，ビルロート自身の手によるかどうか不明なものの縫合技術はすばらしかった．写真を撮ろうと試みたが，受付嬢が監視カメラで絶えず見ており，写真を撮ろうとするとマイクを使って大きな声で「ノー！」と叫ぶので閉口した．わざわざこれを見るために日本からやってきたのだからと頼んでも，ゲルマン民族の厳格さからか融通がきかない．それではと，受付で売っていた2,000円ほどの本を買ったうえで写真を撮ろうとしたが，やっぱり「ノー！」．やむなく，通り過ぎる振りをして遠くからシャッターを押した．

念願であったビルロートの切除胃を見学したあと，来た道順とは異なりトラム41とU-2を乗り継いで中心部のカールスプラッツに

写真 2

でた．まだ，pm 4：00であり陽も高かったので，ビルロートのお墓があるという中央墓地へ行くことにした．

ウイーン中央墓地は広大な敷地で入り口も第1門から第3門まであるが，吉野教授の資料で大音楽家達のお墓の近くの第14区画にあるということなので第2門（Tor 2）で降りることとした．カールスプラッツからはトラム71で約25分かかった．

大きな第2門をくぐると，マロニエ（？）の並木道が約300mにわたってつづいていた．第14区画（14 A）は門から約200mほど行った右側にあり，細い道を15m入った角地にビルロートのお墓があった．高さ3mほどのお墓には，ビルロートの横顔のレリーフとTHEODOR BILLROTH, 1829-1894の文字が比較的最近に塗り替えられたと思われる青い色で刻まれていた**(写真2)**．向かって右には小さな松があり，正面には黄色と紫色のパンジーが可憐に咲いており印象的だった．

並木道をはさんだすぐ対側が第32区画(32 A)であり，入ってすぐにモーツァルトのお墓

があった．また，これを囲むようにベートーベン，シューベルト，ヨハンシュトラウス，ブラームスのお墓が林立し，これら大音楽家達のお墓の方がビルロートのお墓より一回り大きく派手だった．

ビルロートは音楽的な才能にも秀でており，音楽評論を雑誌に寄稿し評価を得ていた．ブラームスとは同世代であり親交が深く，「おれ」「おまえ」の仲だったらしい．ブラームスはビルロートの暖かい友情に対し，作品51，弦楽四重奏の2曲をプレゼントしている．この2人が道を隔てて向かい合って眠っていることに何かしらの因縁を感じずにはいられなかった．

この夜は，国立オペラ座でオペラを観賞したが，昼間歩き回ったせいもあり3人とも大半は眠っていた．

翌日も精力的に観光し，夜はジョッキでワインを味わえるホイリゲに行くことにした．トラム38に乗って27分の終点であった．途中，ビルロート通り（Billroth Strasse）と書かれた道を見つけたが，その時はビルロート先生にちなんだものかどうかわからなかった．帰国して調べたところ，ビルロートは普仏戦争に志願して従軍した経験から，災害発生時の救護に即応できるようにと一般女性の教育および看護婦の再教育の機関の設立に尽力したらしく，その功績を讃えて命名されたという．ホイリゲではHeuriger Reinprechtという店に入り，中庭に据えられたテーブルで一杯が300円程度のジョッキ・ワイン2杯と料理を味わった．pm 8：00を過ぎても外は明るく乾いた風が心地よかった．

その後，列車を利用してザルツブルグ経由で学会が開かれるミュンヘンに到着した．ビルロートを訪ねたおかげもあってか，3人とも無事に学会発表を終えることができた．

余談ではあるが，ザルツブルグではホーエンザルツブルグ城内で開催されるモーツァルトのコンサート・チケットが手に入った．pm 7：40頃，ケーブルカーを降りてコンサート会場に向かって3人で歩いていると，突然，「先生！」と叫び声をあげながら飛びついてくる女性がいる．一瞬，何事が起きたのかと皆たじろいだが，よく見るとオペ室のH看護婦さんではないか．ご主人とそのご両親とともに観光に来たのだという．この時ばかりは，世界は狭いとつくづく感じた．